論文

大学生主体の地域活動の展開（下）
DoNabenet in あいちの取り組みから

永井　杏[†]・江口　愛可吏[††]・横井　里帆[‡]・大崎　あゆみ[‡‡]・松宮　朝[‡‡‡]

[†] DoNabenet in あいち元代表、愛知県立大学教育福祉学部 2018 年度卒業生
[††] 愛知県立大学教育福祉学部 2018 年度卒業生
[‡] DoNabenet in あいち前代表、愛知県立大学教育福祉学部 4 年生
[‡‡] 愛知県立大学教育福祉学部 4 年生
[‡‡‡] 愛知県立大学教育福祉学部社会福祉学科准教授

5．DoNabenet in あいちの展開[1]

本稿（上）（永井ほか，2019）では、DoNabenet in あいちの立ち上げから、活動の発展プロセスの検討を行った。本稿では、2017 年 10 月以降の活動内容を中心に、その展開過程、特に地域貢献、地域福祉への展開についてさらに検討を進めていく。

DoNabenet in あいちは、2017 年度は 31 名、2018 年度は 49 名（4 年生 8 名、3 年生 14 名、2 年生 6 名、1 年生 21 名）、2019 年度は 33 名（4 年生 10 名、3 年生 3 名、2 年生 11 名、1 年生 9 名）で活動している。毎年 4 月に、愛知県立大学の新入生歓迎会にてサークル紹介をし、現在は、社会福祉学科の学生だけではなく、外国語学部、日本文化学部の学生も所属している。また、SNS をきっかけに、愛知淑徳大学の学生メンバーも所属している。

2017 年 12 月 2 日以降の食事会の参加者数、当日の様子、学生・地域の方からの声、普段の活動を通して得た成果、その会で出た課題と解決方法について表にまとめた（表 1）。

表 1 からもわかるように、1 年間で 4 回のどなべ会と 2 回の土鍋のつどいを開催しており、年に計 6 回食事会を開催している。顔と顔の見える関係作りというものが活動の目的なので、継続して食事会を開催することが必要であると考えられるが、団体設立当初から途切れることなく開催し続けることができている。

大学生の団体の特徴は、メンバーの出入りがあることである。毎年卒業されていく先輩もいるが、新入生も入ってくる。メンバーの確保は団体を継続させるために重要なことであるため、4 月と 5 月には食事会を開催せず、ミーティングでは、食事会の内容よりも新入生を勧誘する方法について話し合っている。

また、食事会以外にもボランティアや他団体との活動も行っており、2017 年 10 月以降の活動状況について、表 2 にまとめた。

①学生まちづくり甲子園[2]

長久手市学生まちづくり甲子園は、長久手に在住、通学している高校生、大学生に、若者視点で、まちづくりのアイデアを考えてもらう取組で、発表されたアイデアは、今後市民まちづくりプランを作成する際に、具体的なアイデアとして検討を進めていくものである。

② 4 大学学生ワーキング発表会

学生まちづくり甲子園での発表アイデアをもとに、提案を行うもので、ここでの発表をきっかけに、2018 年 2 月 17 日に、愛知医科大学にある「かまどベンチ」を使った大学生の交流イベントを企画、運営した。このイベントは、長久手市が提示した「長久手市大学連携提案事業」として提案し、助成金を基盤にしつつ、ほとんど学生の力で企画・運営したイベントである。

③市民まちづくりプランづくり会議―お試しアクション～流しそうめん

長久手市民 2 名、愛知県立大学社会福祉学科学生 4 名、長久手市役所職員 2 名で「わいパクチーム」を結成した。この活動は、DoNabenet in あいちの目的でもある、一緒に食事をとることでわいわい楽しみながらつながりをつくることを目的としている。

④のろし祭り（2018/9/29）―長久手市大学連携提案事業

1　本稿の前半（上）は、永井ほか（2019）を参照いただきたい。また、本稿の背景となる長久手市の大学連携については、松宮（2011）、小島ほか（2018，2019）、松宮ほか（2018）にまとめている。

2　長久手市ニュースレター。

表１：活動の内容・課題

日付	内容	メニュー	参加した学生メンバー数	参加者数	当日の様子	学生の声・評価	参加者の声・評価	成果	課題と解決方法
2017.12.2	第16回 どなべ会	ぼたん鍋、 炊飯器ケーキ	16	32	参加者数が多く、とても賑やかな会だった。	参加者が多いため、声が通るか不安。	他のテーブルにも移動できるような工夫があるとよい。	ボスティングやサロン参加のおかげで参加者が増えた。	食事を作る係の学生メンバー（以後、お食事さん）の負担が大きい。→紙皿や紙コップを用いて洗い物の負担を減らす？ 調理器具（備品）が不足。 →買い足す。
2018.3.3	第17回 どなべ会	巻きずし	21	11	・学生メンバーの人数の方が多かったが、その分、参加者と濃い話をすることができた。				
2018.6.2	第18回 どなべ会	世界の料理	23	20	1年生（14名）が多く参加し、1年生にとって初めての食事会だった。	緊張していたが、料理がきたら打ち解けて話せた。	テーブルに一人、進行役がいるとよい。	ミーティングに参加できない場合は、LINEを使って情報共有できた。	・子どもとの関わり方について（注意の仕方）。 ・メンバーが増えた＝人が多すぎて仕事を割り振れない。 →「どなべ会」と、「つどい」で担当を分ける？
2018.7.7	第7回 土鍋のつどい	ちらし寿司、 どら焼き	19	10	リピーターの参加者が多い。落ち着いて交流することができた。	・参加者が料理の手伝いに加わったときの衛生上の問題。 ・参加者以外にも料理をお裾分けする。	・レシピ知りたい。		・ボスティングのチラシを見て参加した人少ない。 →やり方要検討
2018.9.1	第19回 どなべ会	防災食 （にゅうめん、お麩のフレンチトースト、スナック菓子でポテトサラダ）	17	42	・過去最大の参加者数となり、椅子が不足した。 ・市役所職員3名、DoNabenet inあいちのOBOG3名が参加。	・長久手市西小校区共生ステーション（以後、共ステ）に来ていた小学生に、会への参加を促す声掛けをした。 ・お礼状の作成は大事。	・共ステの備品であるマイクを使用することを勧められる。 →全体に向けて指示を出しやすくなった。	・広報活動として、共ステにいたママさんに直接チラシを渡した。 →初参加の子ども連れのママさんがいた。 ・災害に対して意識を高めるために、非常食（スナック菓子からポテトサラダ）を参加者とともに実際に作る。	・メンバーの役割、負担の軽減方法について。
2018.11.10	第8回 土鍋のつどい	かぼちゃ鍋、 おばけサラダ、 スイートポテト	18	7	・ハロウィンらしく、参加者も学生も仮装をして、楽しめた。	・食事会中に席替えをしたい。 ・学生メンバー（お食事さん）の負担軽減について。	・フェイスブックや招待状による参加者が多い。	・他のイベントへ参加したときに繋がった方が来てくれた。	・受付前に来てしまった参加者への対応について ・参加者の特性をリサーチし、アイブレや想い伝えの内容を決める必要あり。
2018.12.1	第20回 どなべ会	4種の鍋、 サラダ	16	12	・子どもの参加（1名）が少なかった。 ・久しぶりにどなべ会に参加してくれた参加者がいた。 ・サンタの格好をしたり、クリスマスツリーを用意したりして季節感のある会にできた。	・受付前、参加者とお話しできていた。 ・お食事さんだったが、中に入って座って交流できた。	・チームワークがよい。 ・どなべ会が子育ての息抜きになる。	・お食事さんの負担軽減のために、役割を交代することはできた。しかし、手順がわからず困った。	・お食事さんの手伝いをするメンバーと、残って参加者と交流するメンバーを決めたほうが良い。 ・不足している備品をリスト化し、買い足す。
2019.3.2	第21回 どなべ会	どなべ食堂 （味噌汁、卵焼き、肉じゃが からあげ、おこしもの）	15	17	・回想法による実験。 ・わいパクチームや、共ステにいた子どもとともに、おこしものを作った。		・郷土料理（おこしもの）を知ることができた。	・朝日新聞、ひまわりネットワーク（ケーブルテレビ）から取材を受けた。	
2019.6.1	第22回 どなべ会	豚汁、塩麹スープ フルーツポンチ	11	14	・代替わり後、また、1年生にとって初の食事会。 ・持ち寄り品（スイカ）を頂いた。	・スタート時間が遅れてしまった。 →開始時間早める？	・想い伝えを長くやってもいい。 ・OBOGとの交流も大切にする。	・どなべの認知度が上がってきている。	・共ステのコピー機を使用するときに料金発生。 →印刷物（アンケートや当日の配布資料）は事前に用意する。 ・地域の方と連絡をするツール（LINE@）を作成。 →広報する。
2019.7.6	第9回 土鍋のつどい	お弁当	13	10	・大きなお弁当箱に料理を詰めて、提供した。 ・参加者が料理を手伝ってくれた。（包丁やエプロンを持参してきた参加者がいた。）	・多くの課題が出たが、きちんと話すことができた。	・参加者から、運営のお手伝いをするよ、という声が上がる。	・その日に出た課題を、当日の振り返りの時にきちんと話すことができた。	・参加者が料理をすることについて。 →やる会、やらない会を作る。または、室内でみんなで作ることができるメニューを考える。

表２：2017 年 10 月以降の活動状況

日付	イベント名	内容	場所	参加者	参加・活動のきっかけ
2017.10.28	①学生まちづくり甲子園 第１回打ち合わせ	発表テーマを決める。10年後に残したい長久手の「宝物」は何だろう？	長久手市役所	学生2名	市役所職員から
2017.11.25	学生まちづくり甲子園 第2回打ち合わせ	取り組みアイデアを決める。他のグループの人たちとも話し合い、アイデアを膨らませる。	長久手市役所	学生2名	市役所職員から
2017.12.9	学生まちづくり甲子園 第3回打ち合わせ	取り組みアイデアを深める。取組アイデアの内容を深め、発表の準備をする。	長久手市役所	学生5名	市役所職員から
2018.2.10	学生まちづくり甲子園 発表（本番）	市役所職員・市民に向けてアイデアを発信する。	福祉の家	学生5名	市役所職員から
2018.3.24	②コラボ！逆指名大会 （4大学学生ワーキング発表会）	市役所職員・市民に向けてアイデアを発信する。	福祉の家	学生3名	大学教員と市役所職員から
2018.8.4	長久手市西小校区夏祭り	運営のお手伝い。	長久手西小学校	学生8名	まちづくり協議会の方から
2018.4.22 2018.5.26 2018.6.30	市民まちづくりプランづくり会議	長久手市総合計画を策定する際の、「市民の声」を取り入れるための会	長久手市	学生2名 地域の方2名 市役所職員1名でグループを結成（わいパクチーム）	市役所職員から
2018.9.1	③市民アクション 「竹で流しそうめん」	DoNabenet inあいちの食事会の後、わいパクチームのメンバー、そして、共ステを利用する市民とともに、流しそうめんを行う。	長久手市西小校区共生ステーション	学生10名	市民まちづくりプランづくり会議
2018.9.29	④のろし祭り	電気やガスが使えない災害時を想定し、水でカップ麺を食べる。市役所から、災害備蓄用パンを寄付していただく。	イオンモール長久手	学生13名	大学教員から
2018.10.14	どなめん会	現役学生メンバーとOBOGの交流会	長久手市西小校区共生ステーション	現役学生14名 OBOG18名	卒業生から
2018.11.18	⑤長久手市市内一斉防災訓練	炊き出し。市民団体「ぷちヴェール長久手」とコラボ	長久手西小学校	学生9名	毎年参加。コラボのきっかけは、DoNabenet inあいちの食事会の際に、市民団体の方から直接声かけ
2018.11.18	餅つき大会	運営のお手伝い	井堀県営住宅	学生6名	Tさんから
2018.12.15	長配3丁目サロン （長久手市）へ参加	DoNabenet inあいちの紹介。認知症すごろくを行う。		学生2名	DoNabenet inあいち食事会参加者のIさんから
2018.12.22	長久手市4大学連携4U	体感型芸術	愛知県立芸術大学	学生6名	大学教員と市役所職員から
2019.2.17	かまどベンチお披露目会 （2018年度助成金事業）	かまどベンチを用いた、他大学との交流会。	愛知医科大学	愛知県立大学　7名 愛知医科大学　8名 市役所職員2名	長久手市大学連携提案事業（助成事業）から、自主企画
2019.3.2	市民アクション 「おこしものを作ろう」	わいパクチームのメンバーや参加者である市民とともに、この地域の郷土料理である「おこしもの」をつくり、DoNabenet inあいちの食事会で提供する。	西小校区共生ステーション		市民まちづくりプランづくり会議
2019.3.23	大学連携交流会	2018年度の活動の報告と、他大学との交流会。	福祉の家	学生2名	大学教員と市役所職員から
2019.8.3	長久手市西小校区夏祭り	運営のお手伝い。	長久手西小学校	学生1名	まちづくり協議会の方から
2019.6～	あすともカフェ （2019年度助成金事業）	認知症カフェとDoNabenetinあいちのコラボ企画。			長久手市大学連携提案事業（助成事業）から、自主企画

当初、リニモテラスと呼ばれる外の広場にて、はそり鍋を使ったパッククッキングを行う予定だったが、雨のため予定を変更した。災害時、電気やガスが使えないという状況を想定し、お湯ではなく、水を使ってカップ麺を食べるという企画を行った。市役所から、災害備蓄用パン 48 缶をいただく。参加したメンバーから、「食の力は、偉大である。」「食あるところに人集まる、ということが分かった。」という声が挙がった。天候による急な予定変更だったため、前々日に、市役所の職員に災害備蓄食品の提供をお願いできないかと連絡をすると、災害備蓄用パンを用意していただけた。学生の活動を支え、協力してくれる人は近くにいると感じた。

⑤長久手市市内一斉防災訓練―他団体とのコラボ

長久手市市内一斉防災訓練には、2015 年から毎年参加している。DoNabenet in あいち単独で炊き出しを行い、参加者に無料でおしるこや豚汁を提供した。食材費は全額、西小校区まちづくり協議会に補助してもらい、はそり鍋と LP ガスは、長久手市安心安全課に貸していただいた。そして、2018 年度の訓練では、長久手市でアレルギー啓発の活動を行っている「ぷちヴェール長久手」という団体とコラボして、炊き出しを行ったもので、他団体とコラボをして炊き出しを行った事は初めてである。ぷちヴェール長久手は、「アレルギー患者と家族、関係者」への支援活動をしている団体である。

コラボのきっかけは、食事会に、ぷちヴェール長久手のメンバーの方（S さん）が参加したことによる。西小校区まちづくり協議会の K さんがぷちヴェールのメンバーとつながりがあり、DoNabenet in あいちに話を繋いでくださった。

炊き出しは、豚汁（アレルギー特定原材料及びそれに準ずる原材料 27 品目中、豚肉・大豆使用）と野菜の塩麹スープ（アレルギー特定原材料及びそれに準ずる原材料すべてフリー、豚肉、大豆等が食べられない方などに対応）の 2 種類をメニューとした。このメニュー決めや調理手順の計画は、全てぷちヴェール長久手が行った。DoNabenet in あいちのメンバーとは、顔合わせを兼ねた勉強会を行い、本番前日にも顔合わせと手順の確認、準備を行った。

ではなぜ、この 2 つの団体はコラボをすることができたのか。まず両団体は、災害時など地域が困ったときを想定しており、活動に対する想いが共通している。また、DoNabenet in あいちは食事を用いることで、初対面の人同士でも話しやすい環境作りをしている。ぷちヴェール長久手は、アレルギーを持っていない人も参加する場でアレルギー特定原材料及びそれに準ずる原材料を除去した食事を提供する炊き出しを行うことで、災害時に困る人がいること、そしてその人々がどのように困るのか、ということを地域住民に呼びかけている。両団体は、災害時、地域住民で助け合うという意識を住民に持たせ、様々なアプローチ方法を用いて助け合う関係作りを実現させていると考えられる。

以上の活動を振り返ってみると、2017 年度以前にも、市内一斉防災訓練にて炊き出しをしたり、シルバー人材センターの方々と芋掘りをしたり、市民団体と活動することはあった。2018 年度以降は、それらの活動に加えて、DoNabenet in あいちの卒業生からのお誘いをきっかけに行政が主催するイベントに参加したり、今までの活動や食事会で築いたつながりをきっかけにサロンへの参加も進めたりしてきた。

食事会以外の活動について、2015 年 11 月から 2017 年 11 月は 19 回、それ以降から現在に至るまでも 19 回である。同じ期間で、回数に違いは見られないが、活動の中身を見てみると違いがわかる。この違いを 2 点述べていく。

第一に、食事会以外の活動の内容と、その活動目的の変化である。以前は、認知度向上と、食事会参加者を増やすことを目的として、地域のイベントやサロンにこちらが出かけていた。しかし、2017 年 10 月から始まった「学生まちづくり甲子園」への参加を皮切りに、食事会だけではなく、行政や市民団体とコラボして、活動することが増えた。地域のまちづくりに対して、普段活動していて感じることを基に意見を述べたり、自らアクションを起こしてイベントを企画したりしている。これは、災害時に助け合えるまちをつくるために、行政へ働きかけ、直接学生がまちづくりに参画したものと言える。

第二に、DoNabenet in あいち初の試みとして、「どなめん（メンバーの呼称）会」という、現役学生メンバーと OBOG の交流会を企画、開催したことである。卒業生から、今まで聞く事が出来なかった活動に対する思いを聞くことができた。OBOG には、卒業しても食事会に来てくれる方もいる。食事会後に毎回、会の振り返りを行う時間を設けているのだが、OBOG もその場に同席して下さり、会の参加者として、また元メンバーとして、という両方の立場から、アドバイスや意見を与えてくれる。このように、OBOG との交流をとおして、縦のつながりを築くことで活動の幅を広げることができたり、アドバイスを受けることができたりする。卒業生との関わり、つながりを築く機会は、大学生の団体にとっては有益なものであると考えられる。

次に、実際に活動している地域である、長久手市の取り組みを見ていく。大学の第三の機能である社会貢献活動の実現に向けて、長久手市は大学連携に力を入れている（小島ほか, 2018, 2019;松宮ほか, 2018）。2009 年 3 月に策定された市の総合計画の

基本施策において「大学をまちづくりに生かす」ことを表明し、2018 年 3 月に「長久手市大学連携推進ビジョン 4U」が策定され、取り組みが進められている。また､「長久手市大学連携提案事業」という、学生の活動に対して市が助成金を出すという制度もあり、長久手市は、学生の活動を推進し、支援する環境が整っていると考えられる。表 1 の参加・活動のきっかけを見てみると、「市役所職員や大学の先生などからの声かけ」が目立つ。つまり、地域の活動に参加するためには、大学生の力、つながりだけでなく、周りの大人からの声かけがきっかけとなることが多く、鍵を握っているといえる。

ではなぜ、新規事業に取り組み始めることができたのか。新規事業や、市内のイベントへの参加など、「食事会」以外の活動をし始めた頃は、2 つの効果を期待した。第一に、DoNabenet in あいちの活動や団体について、市民に知ってもらうきっかけにすることである。第二に、これらの活動によって、DoNabenet in あいちが目指す、「顔と顔の見える関係づくり」を促進することである。永井ら（2019）においても、外部とのつながりづくり、また、食事会参加者を増やすための工夫として、「食事会に来てくれるのを持っているだけでなく「地域へ自分たちが出ていくことを大切にしよう」という想いが強くなったと述べている。

ミーティングにてよく挙がる問題点として、「食事会」の参加者が固定化している点が指摘される。今あるつながりも大切にしながら、新たなつながりを構築するためには、自分たちから外に出ていくことも必要なのではと考えてきた。この課題の解決策について、地域の子育てサロンに参加すること、共生ステーションに来られない方もいるため高齢者などの施設を訪問すること（出張どなべ）、地域のイベント（防災訓練、小学校の運動会、サロン）に参加することなどが、ミーティングの際に学生メンバーから意見として出た。この意見を生かし、現在の食事会、団体の広報方法としては、① SNS 投稿、②共生ステーションにチラシを掲示、③長久手市のイベント（防災訓練、共生サミット、こども食堂）に参加した際に手渡しでチラシを配るという方法を採っている。また、助成金事業の機会を用いて、出張どなべのような活動を開始している。つまり、長久手市がこれらの制度、体制を整え始めた時期と、DoNabenet in あいちが出張どなべなど、お食事会以外の活動を進めていこうという流れになり始めた時期が重なり、活動の中に、自然と新規事業が入ってきたともいえる。

こうした活動の地域への展開とともに、さらなる福祉活動の展開を進めている。次節では、回想法を取り入れた展開について見ていくことにしたい。

6．回想法への展開

2019 年 3 月 2 日の食事会は、テーマを「懐かしい味」とし、回想法を取り入れた食事会を開催した。回想法とは、高齢者の過去の回想を通して、人生の再評価や人生満足度の向上、対人関係の形成をはかろうとする援助方法のことである。本節では、DoNabenet in あいちの活動内で行った、「食」を活用した回想法の実験について当日の様子も踏まえながら検討してみたい。

実施日時：2019 年 3 月 2 日 11 時 15 分～ 12 時 30 分

①目的と概要

目的：食事をしながら、人と話をすることで、思い出の味やそれに関するエピソード記憶（楽しい記憶や悲しい記憶）がどのようによみがえってくるのかを明らかにする。また、味覚による記憶の回想が人の精神的な面にどのような影響を与えるのか、集団の中でどのような作用をもたらすのか明らかにする。

概要：参加者 32 人（市民参加者 18 人（うち子ども 4 人）学生 14 人）。事前に一部の参加者にアンケートを行い、思い出の味を調査した。その回答からメニューを決定し、卵焼き、味噌汁、肉じゃが、から揚げを作った。さらに参加者の方が、愛知県でひな祭りの際に食べるおこしものを振舞ってくださった。５～６人のグループを５つ作り、グループごとで食事をしながら、思い出の味を回想してもらった。

方法：調理後グループに分かれ食事をした。普段の食事会では、グループごとに自由に会話をしてもらうが、今回はあらかじめテーマを設定し、そのテーマに沿ってグループごとで会話をしながら食事を楽しんだ。テーマは、①思い出の味や懐かしい料理について②それについてのエピソード（いつ・どんな時に食べたのか）とした。各グループ内に司会と記録者の役割（両者とも学生）を設け、参加者の発言内容や表情、他の参加者との関わりの様子などを観察し用紙に記入した。また、最後に参加者の方へのアンケートを行った。当日の流れは以下の通りである。

11:00　受付開始
11:15　始めの言葉
11:20　アイスブレイク（参加者の緊張をほぐすための簡単なミニゲーム。今回は回想法を活用するということで、おはじきを使用したミニゲームを行った。）
11:45　食事開始、想い伝え（活動を行う目的やその想い、その他地域住民の生活に関わる話題を、学生から参加者に伝える時間を設けている。今回は、近隣住民とのつながりについてと回想法について。）
12:30　食事終了　終わりの言葉、写真撮影

②食事の場面での会話の状況

実験中の録音記録をもとに、あるグループで展開されていた会話について見ていきたい。この場面で登場する、A さんと C さんが地域の参加者であり、B さんは DoNabenet in あいちのメンバーである。また、B さんは司会進行の役割を担っている。

初めの A さんと B さんの会話は、愛知の郷土料理であるおこしものについてだった。このグループでは、B さんが福井県出身であり、C さんは学生で、現在山梨県に独り暮らししているとのことであった。出身地や居住地が異なるメンバーが集まることで、地域特有の料理の話で盛り上がっていた。また、独り暮らしをしている C さんにとって、肉じゃがは母の味を思い出すものであり、この場面はまさに、懐かしい記憶が回想された場面となっている。

DoNabenet in あいちのメンバーである B さんの司会進行により、グループの全てのメンバーが会話に参加できていた。また、B さんは C さんに、食事中の会話のテーマとなっていた思い出の味について質問している。テーマ設定がなされていたことで、より思い出の味の回想を促すことができている。

記録用の映像を分析すると、会話の途中で他のグループへ移動する参加者もいた。グループの中には、会話を楽しみたい人もいれば、会話中でも食事を楽しみたい人もいる。また、顔見知りのメンバーと話したいという参加者もいた。そのような場合にも、別のグループへの移動が可能で自由度が増したため、それぞれの思いを実現できた。また、グループの一部の参加者だけでなく、様々な交流の輪が生まれていた。

表３：あるグループの会話の様子

	＜学生1人、参加者5人（うち子ども2人）のグループの会話＞ －おこしものを食べながら－
Aさん（参加者）	おこしものって米粉でしょ。
Bさん（学生）	そうですね。米粉でできた…
Aさん	あれでしょ。さっき聞いたんだけど、おこしものってこの辺の地方のものなんだよね？
Bさん	ああ、そうみたいですね。私も地元ではなかったので、愛知来て初めて知りました。私、福井県出身なんですけど。福井には全くなかったです。
	Aさんさっきポテトサラダのお話聞かせてもらったんですけど、（Aさんはポテトサラダが思い出の味と言っていた）どんな味だったんですか？卵焼きとかも甘めが好きとかだし巻きが好きとかあるじゃないですか。こういう味が好きとか。
Aさん	甘めの味が大好き。具体的に料理とかは作ったことはないけどね。
Bさん	あはは、そうなんですね。
Bさん	Cさんは何か好きな思い出の味とかありますか？
Cさん	肉じゃがとか好きですね。
Bさん	そうなんですか。肉じゃがだと結構甘い感じの？
Cさん	そうですそうです。僕、大学が山梨で。ひとりじゃ肉じゃがって作ろうと思わないじゃないですか。
Bさん	そうですよね。
Cさん	だから思い出す味です。
Bさん	やっぱお母さんが作った味を思い出しますか？
Cさん	そうですね。
Bさん	ああ、やっぱり美味しいんですね。

③アンケート結果

実験終了後にアンケートを実施した。得られた回答を全て以下にまとめた。

参加者から集めたアンケートの回答をもとに、「回想した記憶・エピソード」「感想」からキーワードを抽出し分析した。最も多く使用されていた単語は「親」（「父」、「母」、「お母さん」、「母親」含む）で７回だった。次いで「祖父母」（「曾祖母」含む）が

表 4 ：参加者へのアンケート結果

	性別	年齢	回想した記憶・エピソード	感想
aさん	男性	60代	給食の脱脂粉乳はまずくて飲めなかった。 さとうきびをよくおやつ代わりにかじっていた。 サツマイモを食べに曾祖母によく連れて行ってもらった。 果実、野菜が美味しかった。 八百屋さんに行くと、新聞紙によく包んでくれた。	
bさん	男性	20代	肉じゃが	とても美味しかったです。
cさん	女性	10代	家では祖母が作るときと母が作るときがあるが、同じ料理でも味が異なる。親子でも人によって違うのだと思った。	今はまだ、「懐かしい味」というのがわからないけど、いつか懐かしい味だなぁと思えるときが来るのだろうなと感じた。
dさん	男性	70代	どなべの肉じゃがは、おふくろの味以上に若い方の味で美味しかったです。 先回、男性の料理教室に参加し、おこしものを教えてもらった。美味しかったです。	どなべ食堂、雰囲気が出ていて、楽しく頂きました。
eさん	女性	40代	大学生になりたての方から色々話を聞けた。	こういう活動はずっと続けて欲しい。 子育て世代へのフォローをぜひお願いします。（圧倒的に人手が足りないので。）
fさん	男性	50代	カレーライスで調理実習を思い出した。 肉じゃがとポテトサラダで母の手料理を思い出した。	とても楽しく食事ができました。 どなべの皆さん毎回楽しい企画ありがとうございます。
gさん	男性	70代	好きな食べ物を自己紹介時に言いましたが”ひろたのシュークリーム”と答えました。これは子供の頃好きだったものでよくお土産にもらったり、親が買って帰ってくれたものです。	食べ物は確かに昔を思い出すものですね。 回想法にはいいかも。 食べ物については新しいものより古いものを思い出すようです。
hさん	男性	30代		回想をしようとしても思い出せなかった。すみません。
iさん	男性	40代	県外出身の人と話ができたのですごく楽しかった。	
jさん	男性	50代	気分転換	他のイベントのメールも欲しい
kさん	女性	20代	給食で好きだったものの話（ソフト麺など） つまみ食いをしたエピソード カレーの具材についての話	参加者の方の話を聞いて思い出したこともあった。 味や食事と記憶が結びついていると感じた。
lさん	女性	30代	母の家系は団子には醤油のみ、父の家系は砂糖醤油で甘い。父の甘さに合わせて我が家の卵焼きは甘いのだったなと感じました。 肉じゃがも大きな鍋でどかっと作って祖父母宅に持って行ってた味の記憶。 味噌汁は赤味噌で甘めで濃いのが食卓に並びます。 おこしものは祖母の家で2月の終わりに親戚も来て1升×4回こねて小さく丸めた色玉を形に乗せて作って食べている。	1年ぶりにお邪魔しました。 今の4年生が1年で入学してどなべに加入された方と一番内容の濃いおつきあいをさせていただき、6月の回にはもう卒業してるんだなと寂しい気持ちです。料理をするのが好きなので今回もお時間を共にできてよかったです。 子供3人を一人で育てることになり、大学生との交流は救われる場面が多いです。
mさん	男性	10代	実家で食事をしていた時の思い出（ただ家で鍋があまり出なかったため、主に味とかです。） 母親に怒られてしまった時の思い出	今回自分のところにはお味噌汁の鍋が来たのですが、お母さんから好き嫌いはダメよと言われたのを思い出しました。とても美味しかったです。

４回、「給食」が２回であった。また、感情を表現する言葉として、「美味しかった」が５回、「楽しかった」が３回、「好き」が２回、「怒られた」が１回、「まずい」が１回であった。これより、回想される人物としては父親や母親が最も多かった。また、両親だけでなく、祖父母とのエピソードも幾つか挙げられた。ここから、家族や家庭での記憶が思い出されやすいことがわかる。一方で「給食」という言葉から、学校生活の場面も回想されている。日常のある一場面のエピソードを客観的に回想する人もいたが、「美味しかった」「楽しかった」「怒られた」「まずい」という主観的な感情を思い出す人もいた。回想したエピソード自体がポジティブなもので楽しい思い出の場合でも、ネガティブなもので苦い思い出の場合でも、参加者が語る際には明るい表情であった。

実験全体の感想として「美味しい」、「楽しい」といったものが多くあることから、ただ単純に昔を思い出すだけではなく、他人と交流することや食事をしながら交流することにも、ポジティブな感情を生み出す効果がある。

また、食事中に記入していた各グループの記録用紙より、食事開始直後はどのグループもテーマに沿った会話が展開されており、幼い頃に食べた料理や思い出の味について語られていた。また、この日食べた肉じゃがや卵焼きの味と、自身に馴染みのある味を比較する発言もあった。時間が経過して行くにつれ、おこしものが愛知県特有の食べ物というところから、互いの出身地について、家族との関係について話すグループもあった。アイスブレイクでおはじきを使用したことから、昔使用していた道具についても話題に上っていた。また、食事の始めの想い伝えで、近隣住民とのつながりについて話したため、近隣の人との関係を語る人もいた。参加者同士でにこやかに話す様子が終始見られた。他のグループに移動して様々な参加者と交流する人もいた。参加者同士でエピソードを共有することで、交流が活発になることが認められており、「懐かしい味」によって、参加者の互いの関係の在り方に何らかの影響を与えるという点で、期待されていた効果が実験に活かせたといえる。さらに今回の実験では、食事を通して忘れていた記憶をふと思い出す参加者もおり、「懐かしい味」を回想法に取り入れることで、五感が刺激されそれが回想のきっかけとなっていることも明らかになった。回想法に味覚を活用すること、また「懐かしい味」を取り入れることが有効であり、食事を取り入れた回想法の方法と可能性を見出すことができたと思われる。

７．活動の評価と課題

DoNabenet in あいちに所属し長久手市で活動している大学生は、現在の活動に対してどのように感じているのだろうか。行政や地域の人と関わりながら社会貢献活動することについて、実際に活動する大学生はどのように感じているのかを明らかにするために、インタビュー調査を実施した。

インタビューについては、メンバー５名（4 年生 3 名、3 年生 2 名）に対して、2019 年 7 月 25 日～ 2019 年 7 月 31 日で、一人ずつ 1 ～ 1.5 時間程度で行った。このインタビュー結果を基に、大学生が社会貢献活動をするために求められる条件、必要な環境、課題について見ていく。またインタビューの回答について、文言などはそのまま掲載している。

表５：新規事業に取り組んだきっかけ、動機

O さん ・先輩から引き継がれたつながりがあった。 ・過去にイベント参加のお誘いを受けたとき に、きちんと参加していたため、そのあともだんだん呼ばれるようになったのではないか。 ・こちらから動くよりも、市職員や地域の人に声をかけてもらったことが活動のきっかけになっていると感じる。
P さん ・先輩が取り組んでいたため。 2019 年度助成金事業（あすともカフェ）について ・大学の先生から、「助成金事業として、認知症家族と DoNabenet in あいちの活動をコラボしてやらないか。」と声をかけてもらった。その活動は、防災にも絡めることができるため、地域のためになる。また、以前から、新たな食事会参加者を呼ぶためにも、現在食事会を開催している共生ステーションだけでなく、自分たちから地域に出て活動すること（出張どなべ）をしたい、という声がミーティングで挙がっていた。そのため、この事業を行うことで、新たなつながりを作るきっかけとなり、団体のためにもなると考えたため。
Q さん ・広報活動の一環。食事会の広報方法の一つとしてポスティングを行っていたが、限界を感じた。そこで、地域の大人や行政の力を借りるようになった。そこでつながりができ、イベントの時など「手伝って。」と声を掛けられることが多くなった。地域などの周りが、大学生の力を必要としていると感じた。

R さん
・メンバーに声をかけられたため。
2018 年度助成金事業（かまどベンチ）について
・既存の活動である食事会は、ネットワークや、食事会の運営、準備の方法の土台ができている。今まで、それに従って活動するだけだった。一から企画を立ち上げ、運営することはとても大変であると思うが、そのような経験を大学生のうちにすることで、将来社会に出たとき にその経験が役に立つと思ったため。
・どなべ の活動に愛知医科大学の学生が興味を持ってくれて、「DoNabenet in あいちとコラボをしたい」と言ってくれたことが嬉しかったため。

S さん
市民アクションについて…
・メンバーの先輩から誘われたため。
・市のイベント、大学の外での活動に興味を持ったため。しかし実際は、先輩が築いたつながりを途絶えさせないように、つないでいかないと、という思い もあり、そちらの思いの方が大きかった。
2018 年度助成金事業（かまどベンチ）について
・他大学の学生と活動できること、医科大学に行けることに興味を抱いた。
・少人数で新しいイベントを企画し運営する点、単発のイベントであるため、持続性がなくてもいい点、同世代の交流の場である点の 3 点が、普段の食事会と比べてラフで自由な活動ができて、良いと思った。
2019 年度助成金事業（あすともカフェ）について
・DoNabenet in あいちの活動の幅を広げていけると思ったため。ちょうどミーティングで、対象や場所を絞った会など、いつもの食事会から派生した会を開催したいと考えていたところであったため、「認知症×防災」という取り組みはおもしろそうだと思った。
・2018 年度は新規事業に重きが置かれていたため、2019 年度はお食事会にフォーカスし、原点回帰して、活動をしていきたいと運営メンバーで話していたので、助成金事業はやらないつもりであった。しかし、地域連携センターの方から、助成金事業の話と、認知症カフェと DoNabenet in あいちのコラボの話を受け、断り切れなかった。なぜかというと、1 点目に、対等ではない立場である学生と先生の関係性や、断った場合の今後の関係性を考慮してしまったため。先生と十分なコミュニケーションがとれないまま話が進んでしまった感じがする。2 点目に、去年の助成金事業の企画である「かまどベンチ」という成果があり、今年も大人から期待されていると感じたため。3 点目に、市職員にとって、大学生からの助成金申請の枠を埋めたいのではないか、と考えたため。これらを考えた結果、この話を受けることにした。

新規事業に取り組んだきっかけや動機としては、先輩や他のメンバーからの声かけ、市職員、大学教員や地域の大人からの声かけなど、周りから声をかけてもらったことがほとんどであった。市職員や地域の人とのつながりは、先輩から引き継がれたものや、自分がイベントに参加したときに新たに築いたものであった。声を掛けてもらってから、自分が興味を持ったり、将来を考え、自分のスキル向上のためにチャレンジすることを決めたり、団体の活動方針との関係性を考慮し、団体のメリット、デメリットを考えたりした上で、取り組んでいることがわかった。また、自分の大学以外の場所で活動することに魅力を感じているメンバーも少なくない。

気になる点としては、「話を受け、断り切れなかった。」という点がある。大学教員と学生、行政と学生、地域の大人と大学生という、お互いの関係性を考慮したり、大人からの期待に応えようとしていたりする点があることがわかった。そのために、自分たちの活動計画、活動方針を一部変更して活動しているという現状も見えてきた。

表 6：行政や地域の大人と大学生が一緒に活動をすることで生じるメリット

O さん
・DoNabenet in あいちの認知度を高めることにつながる。
・DoNabenet in あいち主体で行う何らかの活動のとき に、まちづくり活動で得たつながりが活き、協力してもらえる。例えば、食事会に参加者として来てもらえた、有力な情報提供をしてもらえた、つながりたい人との仲介をしてもらえた、など。

P さん
・DoNabenet in あいちの認知度が高まる。
・「大学生すごいね。」「大学生がいると助かるよ。」と、地域の方から声をかけられた。⇒自分たちの力が地域のためになっていると実感できる。
・市民団体「ぷちヴェール長久手」は、アレルギーを持っている人は、災害時に避難したとき に困ってしまうこと、そして配慮が必要であるということを広めるために活動している。この問題について知らなかったが、コラボをすることによって知ることができ、アレルギーについて考えるきっかけになった。また、DoNabenet in あいちは食に関わる団体だからこそ、他人事ではない、と積極的に取り組むことができた。その証として、食事会のテーマに「アレルギー 特定原材料及びそれに準ずる原材料を除去した食事」と設定して、この防災訓練で学んだ料理と調理方法を参考にして料理をした。そして、想い伝えで、災害時の炊き出し時に注意すること、困る人がいることなどを話し、どなべの食事会の参加者にも、この想いを伝え、広めることができた。

Q さん ・DoNabenet in あいちが知ってもらえるきっかけとなり、認知度が高まってきた。市内のイベントに参加したとき やボランティア先で、「DoNabenet in あいち、知ってる。」と声をかけられたことがあった。 ・活動の幅が広がった。例えば、大人と一緒に企画したことで、竹を使った流しそうめんを企画することができ、そのあとも、ミーティングにて食事会のことについて話しているとき に「以前やったように、DoNabenet in あいちの食事会で、竹を使った流しそうめんをやりたい。」という声が挙がった。
R さん ・かまどベンチのコラボをするということは、お互いの考え方を理解し、役割分担をしながら一緒にやるということ。つまり、特に医療分野からの新たな考え方や視点を得ることができ、その考え方が今後の DoNabenet in あいちで活動する際に良い影響を与える。 ・かまどベンチのイベント、食事を使ったイベントは、DoNabenet in あいちとコラボしていなかったら、医大生はやっていなかったと思う。コラボがきっかけで、相手の活動の可能性を広げることができてよかった。どなべの活動の想いである、「つながりの大切さ」が、医大生や地域にも広まればいいなと思う。 ・はそり鍋や LP ガスなど、学生だけで準備、運搬をすることは難しかったが、市職員がやってくれたので、助かった。 ・2019 年 3 月の交流会にて、DoNabenet in あいちの食事会と、かまどベンチの活動の報告をした後、愛知淑徳大学の学生から、「コラボしないか？」と声をかけられた。交流会に参加したことで、さらに新たなネットワークができた。
S さん ・DoNabenet in あいちの活動は、地域に根ざすことを目的としているため、誘われたイベントに毎回参加したり、コラボをしたり、新しいことをし続けることで、地域に信用してもらえたり、助けてもらえたり、見てもらうことができる点 。知名度を上げ、信頼・信用を得ることにつながる。

団体のメリットとしては、主に 2 点あることが明らかになった。

第一に、「団体の認知度を高める」ことである。同時に、地域から「信頼・信用を得ることにつながる」という声があった。認知度を高め、信頼されることで、①の活動のきっかけで挙げた、「市職員や地域の人などから声をかけられる」ことにつながり、これが今後の新たな活動のきっかけになると考えられる。それぞれの活動は独立しておらず、すべて繋がっているようだ。

第二に、「活動の幅が広がった」ことである。例えば備品の準備について、今まで学生だけでは経済面の負担を考えると用意することが難しく、実現させることが難しかった企画でも、大人の知識やつながりによって、また行政に声をかけ手助けしてもらうことで、実現することができた。また、様々な人と活動することで、「お互いの考え方を理解し」、「新たな考え方や視点を得ることができ、その考え方が今後の DoNabenet in あいちで活動する際に良い影響を与える。」という声が挙がった。新たな考え方や知識、アイデアを得ることができた結果、活動の選択肢が広がったといえる。さらに、一緒に活動する人々に、DoNabenet in あいちの活動や考え方を伝える機会が増えたことも、双方の団体にとってメリットであると考えられる。

また、市が企画した、市内の大学生の交流会に参加したことで「新たなネットワークができた。」という声があり、市が 4U や発表会など、大学生同士の交流の場を作ってくれたことで、新しい団体や大学生に、自分たちの活動を知ってもらい、さらにつながりや活動の可能性を広げることができたと考えられる。

表 7：デメリット

O さん ・まちづくり活動の活動量の度合いによるが、メインで行っている活動（食事会）以外にもやるべきことが増え、メインの活動に手が回らなくなる。
P さん ・メインの活動（食事会）との両立。
Q さん ・DoNabenet in あいちの活動は、幅や対象が広いため、児童、障がい者、高齢者など様々な人のニーズに沿えるというメリットもあるが、それに対して、学生の方が活動についていけないことがある。 ・ミーティングにて、以前は食事会をよりよくし、より自分たちが楽しめるようにするにはどうしたらいいかなど、食事会の改善点について話し合うことに多く時間を割いていたが、2018 年度あたりから、その時間が減ってしまったと感じる。以前まで毎回のように食事会に参加してくださっていた参加者が、最近食事会にいらっしゃらなくなったのが気になる。

・DoNabenet in あいちとしての活動の目的や想いについては、後輩に伝えられたと思うが、今どうしても、食事会よりも新規事業の回数の方が多いと感じ、ミーティングでもそちらのお知らせが多く、時間を割いてしまっているのが問題だと思う。
⇒イベント参加のお誘いが来た時に、断り切れないのが原因だと思う。今まで、DoNabenet in あいちの代表が一人で参加していた様子を見て、負担が代表に偏っていないか、と感じていた。そこで、自分たちの代は、負担を分けようということで、みんなで参加しようと呼びかけていたことが、DoNabenet in あいち全体の活動のウェイトを変えるきっかけになってしまったと思う。

R さん
・既存の活動（食事会）と新規事業の活動のバランスが難しい。新たな関係性を築いたり、想いや考え方の共有をしたり、連絡調整をしたりすることが必要で、考えること、やることが増えている。しかし活動できる時間は変わらないので、食事会 + 新規事業という形になり、活動量が増えてしまうのが負担になっている。

S さん
・ミーティングは毎週あるわけではなく、新規事業を始める前と同じ、月 2 回というペースで行っている。活動できる時間は同じなのに、タスクだけが増えている。
・新規事業についての話やお知らせに費やす時間が増え、メインの活動である食事会がおざなりになっていると感じる。あまり話し合わなくても、大きな失敗をすることもないので、普通に過ぎていく感じがする。
・ミーティングについて、お知らせが増えたため、自由な意見交換ができていない。
・助成金事業のような活動を行える団体が、愛知県立大学内に、DoNabenet in あいち以外にあるのか、と考えたとき に、うちしかおらず、DoNabenet in あいちにこのような活動がたくさん乗っかってきている、とも感じる。

団体にとってのデメリットについては、2 点挙げたい。

第一に、「メインの活動（食事会）」との両立の困難さである。限られた時間の中で、新規事業や外部との連絡を行っており、かけられる時間は変わらないのにやることだけが増えている。その結果、ある程度基盤ができている食事会の準備や振り返りに時間を割くよりも、新規事業に対して時間を使ってしまう点が挙げられた。「以前まで毎回のように食事会に参加してくださっていた参加者が、最近食事会にいらっしゃらなくなったのが気になる。」とあったことから、食事会の質や雰囲気が、良くも悪くも以前と変わってしまったのは事実であるように思われる。

また、「ミーティングは毎週あるわけではなく、新規事業を始める前と同じ、月 2 回というペースで行っている。」とあった。学生の学業やアルバイトの負担にならないようにと、このペースでミーティングを行っているため、学生メンバーは、ミーティングの回数を増やすというようなことを前向きに検討していないのかもしれない。

第二に、大学や大人からの DoNabenet in あいちに対する期待が過度である点である。文部科学省の中央教育審議会（2005）は、「我が国の高等教育の将来像（答申）」[3] において、社会貢献を大学の「第三の使命」として捉えていくべき時代となっているとしている。このように、大学生の社会貢献の重要性が言われているのだが、実際、現在の愛知県立大学の学生団体にはそれを実現できる学生団体が多くないため、DoNabenet in あいちに対して活動の負担や、大学教員、地域連携センターからの期待が集中していると考えられる。愛知県立大学には、障がいを持った子どもと関わるサークルや、キッズパークを開催するサークル等があるが、これらのサークルは子どもに対象を絞っている。それに対して、DoNabenet in あいちは、小さな子どもから高齢者まで、と対象を絞っていない。このように、対象が広いという点も、声かけや期待が集中する理由の 1 つでもあると考えられる。

3　http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/05013101.html、2019 年 9 月 30 日確認。

表 8：学生にとってのメリット

O さん ・長久手市で活動しているという、実感が得られる点 。 ・長久手市民ではないが、DoNabenet in あいちに所属しているため、市民と一緒に活動することができている。
P さん ・愛知県立大学の学生として、また DoNabenet in あいちのメンバーとしてという、組織の一員だからこそ、活動できる。 ・まだ顔見知り程度の食事会参加者に、食事会ではない場で出会うと気恥ずかしい思いがあった。しかし、食事会で仲が深まったことで、プライベートな場でも会うことが嬉しいと思うようになった。その時は、市民ではなく、メンバーとして対応している。 ・多世代交流できることが楽しい。自分の親や大学の先生以外では関わらない、働く世代の大人や、市の職員とかかわり 、話すことができることが楽しい。市職員＝堅いイメージ、がなくなった。大人と直接関わったり、メールのやり取りをしたりすることで、マナーなどが身に付き、将来役に立つと思う。 ・大学生になり、初めて 長久手市で暮らすようになったが、どなべ の活動を通して、長久手市に愛着がわいた。よそ者ではなく、長久手市民の一員になれたと感じる。
Q さん ・いろんな価値観を知ることができる。 ・自分のつながりが広がる。 ⇒・自分の興味のあるイベントに誘ってもらえた。 ・スキルサポート。知らなかった資格を教えてもらい、興味を抱き、資格取得につながった。 ・就職先の紹介。
R さん ・かまどベンチについて、自分たちの力で企画を立ち上げ、実行しまとめるという一連の流れを経験できたことが、いい勉強になった。将来、就職後同じような場面に立ったら、この経験を生かしたい。 ・かまどベンチ、4U や交流会について、コラボをして一緒に活動することで、医大生に対するイメージが変わった。遠くて、すこし近寄りがたいというイメージから、医大でミーティングを行い、実際に訪れることで大学や学生の雰囲気を知ることができ、身近に感じることができた。 ・他の大学に入り、キャンパスの雰囲気や勉強している内容などを知ることができた。特に、愛知県立芸術大学に行った際、自由奔放な発想がいい刺激になり、勉強になった。
S さん ・他大学の学生、地域の人、市職員と会って交流できることは貴重で、なかなかできないことだと思うので、いい経験ではあると思う。 ・企画の段階からできることで、自分の言ったことが形になること 。 ・人前で話したり、プレゼンをしたり、たくさんの人とコミュニケーションをとったりする機会が多くあるのは、就職活動や将来に生きてくると思う。 ・人とかかわる ことが好きなので、交通費や時間をかけて参加することに関しては特に問題視していない。 ・個人で考えるとメリットしかない。 ・企画する力、仕切る力、発表や想いを伝えるプレゼン力をつけることができる点 。 ・大学では社会福祉を学んでいるため、授業以外での学びができる点 。例えば、障がいを持っている方や認知症の方を、災害時どう助けるかについて、社会福祉協議会も問題視している点であることを、活動中に知った。その点に関して、学生も考えていける点は、学問的にも有効であると思う。

学生にとってのメリットについては、3 点指摘することができる。

第一に、つながりが広がり、今の自分や将来に有益な情報を得ることができる点である。特に、就職先の情報提供については大学生にとっては重要であると思われる。

第二に、活動によって自分のスキルを上げ、将来に役立つ、という点が挙げられた。これは、ほとんどの学生が感じていた。大学の職員や先生、同世代以外と関わる機会が少ない大学生にとって、小さな子どもから働き世代、高齢者と関わることができる点について、貴重であると認識している学生が多い。

第三に、「愛知県立大学の学生として」「DoNabenet in あいちのメンバーとして」という、組織の一員だからこそ活動できる、という声が挙がった。ミーティングでの情報共有や、先輩や先生からのつながり、声かけで活動する機会が得られていることから、このような声が挙がったと考えられる。組織の一員であるという意識と、一緒に活動する仲間がいる、という点で、活動に参加するきっかけや後押しとなっている。

表 9：負担、困難

O さん
市民アクションに関して
・仕事（活動量）の分担と、介入の程度が難しい。主力では動けない。

P さん
防災訓練に参加して
・大学生の主体性が損なわれる危険性がある。大人に主導権を握られている感じ。料理をすることは特に、大人のほうが慣れており、手際がよい。そのため、防災訓練でコラボをしたとき 、指示されたまま動く、というような形になってしまった。
・地域の大人と大学生の関係は、意見を求めてくれたりすることからも、対等であると感じる。しかし、人にもよると思うが、私は、自分の意見を大人に伝えることに、ハードルがあると感じ、地域の大人に対して意見を言うことができなかった。
2019 年度助成金事業に関して
・活動の思い や目的について、個人的にはおもしろいと思った。しかし、DoNabenet in あいちとしてできるのか、DoNabenet in あいちの想いや活動目的とずれてはいないか、自分は DoNabenet in あいちの運営メンバーであるため、あすともカフェを企画、運営することを決定したが、他のメンバーはこの活動に対してどう思っているのか、DoNabenet in あいちのメンバー 全員を巻き込んでもいいのか、食事会がおろそかにならないか、不安に感じている。
・学生にやってもらえたら助かるといわれたが、大人からの期待が大きすぎると感じる。市職員と打ち合わせをしたとき 、「DoNabenet in あいちらしさを出してほしい。」と言われ、DoNabenet in あいちらしさってなんだ？と考えた。
・団体の方針と大人からの期待に、気持ちのズレがあると感じる。学生の気持ちをうまく理解してもらえていないのではないか、と感じる。

Q さん
・DoNabenet in あいちの活動や長久手市でのボランティア先で出会った人と自分との関係性と、長久手市でプライベートの生活を送る自分との関係性を分けたいが、たまに、「この前見かけたよ。」と、後日声を掛けられるのが、こわい。
・他団体との調整、意見の板挟みにあり、責任が重くのしかかってくることがある。そのため、自分や大学生、団体として、やりたいことがはばかられることがある。大学生はこれらの対応に慣れていないので、大人との距離感が難しいと感じる。

R さん
・責任が重い。
・助成金をもらったり、市職員がイベントに参加したりすることで、大学生のアイデアや行動が制限されてしまい、柔軟性がなくなると思う。発表会や報告をする必要があったため、きちんと成果を出さなければ、と思ってしまい、行動に移す前に一度立ち止まって冷静に考えてしまった。自分のやりたいことよりも、成果が出ることを優先してしまった。
⇒お金があったら、やりたいことができる、と思っていたが、実際にやってみると、報告や発表をしなければならず、責任が重いと感じる。逆にやりたいことを狭めてしまう？
・食事会の場合は、ある程度活動に対して想いの共有がされており、レールがある。しかし、市職員や他大学の学生と一緒に活動するときには、漠然とした不安のようなものを常に抱えている状態だった。
・どこまで市に任せていいのか、わからない。「相談に乗るよ」と言ってくれるが、市職員に頼ることで、市職員の負担にならないか、これは学生がやるべきことなのではないか、と考えてしまい、声をかけづらい。（例えば、意見が合わなかった場合や備品が欲しい場合など、学生でも無理をすればできなくはないが、市職員に頼ったほうがクオリティーも上がるし、スムーズにことが進むと考えられるものなど。）
・市職員と大学生の関係性について、対等な関係ではないと感じる。市職員のほうが立場が上で、一緒にやる、というよりかはお願いをする、という意識があった。
・かまどベンチのイベントについて、様々な目的が考えられる（防災・減災を目指すため、かまどベンチの使い方を学ぶため、地域のつながりを作るためなど）。DoNabenet in あいちだけで活動する際は、その都度、メンバーと直接会って、想いや目的を直接確認することができるが、他団体や大人とコラボをするときは、日程がなかなか合わず、SNS 上でのやり取りがほとんどになってしまった。そのためやることの優先順位がつけられず、困った。

S さん
・学生の本業である学業との両立が難しい点 。
・生活リズムが違うことで、打ち合わせやイベント開催の日程調整が難しい。例えば、市職員の就業時間中に打ち合わせをすることになり、打ち合わせ後の講義に遅刻してしまうことがあった。
・心の負担。心苦しいと感じることがある。大人と学生の関係性はフェアではあると思うが、打ち合わせやイベントに、バイトや試験などが被り、行けないとなると、申し訳ない気持ちになる。
2019 年度助成金事業について
・大学生だけでやる事業ではなく、市の事業なので、失敗や中止、大幅な変更ができない。
・市職員からも指摘されたが、DoNabenet in あいちらしさをもっと出せればよかった。
・大学生に対する、大人の期待や提案を踏まえて決まっている。

・DoNabenet in あいちの運営メンバー 2 人と、地域連携センター 職員、市職員、大学教員と話し合い、事業の骨組みを非常に短いスパンで決定した。決定した後に、他のメンバーに共有するという作業をした。しかしそこで、運営メンバー以外のメンバーとの温度差をすごく感じている。本当はみんなはやりたくないのではないか、と感じてしまい、それが自信の無さにつながり、負担に感じてしまっている。
⇒メンバー全員で、ゼロから企画したわけではないので、メンバーの意見を取り入れることが難しかった。もっと、メンバーの意見を運営メンバーが聞き取り、取り入れることができればよかったのか…？ DoNabenet in あいちの活動の中身に取り入れることができていないと感じる。

学生に生じるデメリットや、負担と感じる点に関しては、4 点ある。

第一に、「大学生の主体性が損なわれる危険性」がある点である。例えば、防災訓練で市民団体とコラボをした時、手際がいい大人から「指示されたまま動く、というような形になってしまった。」という声があり、自分で考えて動くことが疎かになってしまったようだ。また、地域の大人と大学生の関係性としては「対等であると感じる」反面、「自分の意見を大人に伝えることに、ハードルがある」と感じている人もいた。助成金事業に関して、それに伴う「責任の重さ」、「自分のやりたいことよりも、成果が出ることを優先」したという声があり、学生が本当にやりたいことができない危険性があることがわかった。大学生が活動する上での障害として、金銭面の問題が挙げられるが、過度な助成金の支給は、大学生の自由な活動の幅や可能性を狭めてしまう危険性があるのかもしれない。

第二に、大人からの期待が過度である点である。「大学生だけでやる事業ではなく、市の事業なので、失敗や中止、大幅な変更ができない。」「大人の期待や提案を踏まえて決まっている。」「DoNabenet in あいちらしさが求められた」ということから、普段の活動と比べて、責任や不安を強く感じている人がいることが分かった。

第三に、大学生だけでどこまでできるのか、どこまでやることを求められているのかわからず、悩んでいる人がいた。大学生は、主体性を持って活動したいという思いを持っているが、大学生だけの力量では限界があるという現実がある。どのタイミングで大人からのサポートを求めるのか、線引きが難しいという声が挙がった。

第四に、共有の時間の少なさである。これはミーティングの頻度とも関係があると思われるが、「メンバー全員で、ゼロから企画したわけではないので、メンバーの意見を取り入れることが難しかった。」とあるように、企画する段階での気持ちや意見を一致させることが難しいとあった。DoNabenet in あいちは、強制力の弱い団体である。だからこそミーティングやイベントにメンバーがあまり集まらないときがある。しかし「直接話し合える時間を確保することは大切である」という声が多く挙がった。

また、活動の幅が広がると同時に、団体としての方向性を見失ってしまう危険性もあると考えられる。活動の方向性が定まっていないと、メンバー同士の想いがバラバラになってしまい、団体に亀裂が入ってしまう恐れがある。DoNabenet in あいちの団体発足当初、永井ら（2019）によると、「約 1 年間は食事会を開催するまでに至らず、月 1 ～ 2 回のミーティングを行っていた。ミーティングでは各メンバーの想いや今後の活動の方向性を話し合った。」としている。このように、団体で活動を行っていくには活動の目的を話し合い、メンバー間の活動に対する想いを一つに定めることが大切であると考えられる。どのような思いを抱いてその活動に参加するのか、メンバー全員と想いを共有することが必要であると考える。コラボをする際や、新しい事業を始めるときは特にメンバーとの意見や情報の共有が大切であるが、それが不十分であると、漠然とした不安を抱えてしまうといえる。

8．大学生の社会貢献活動に対する支援について

メンバーへのインタビューを通して、実際に社会貢献活動をしている大学生が抱えている想いに触れた。助成金をもらったり、市職員や大学教員、地域の大人と共に活動したりすることで、「活動の幅が広がる。」「大学生の力だけでは不可能なことが、可能となる」ことは、事実であるように思われる。そして、「多世代、特に社会人と関わったり、プレゼンしたり企画したりすることが、将来に役立つ」という声から、新規事業に取り組むことで、自分自身がさらに成長することを目標にして活動している学生は多いと思われる。インタビューにてほとんどの人が、参加する動機として、「自分のスキルを高めるため」、「将来役に立ちそうだから」と挙げていた。将来の自分にとって役立つ内容であると感じることができると、大学生にとっては魅力的なものになると考えられる。

しかし、これらのメリットと同時に、学生自身が負担に感じ、学生団体に生じるデメリットがあることがわかった。永井ら（2019）は、「過度な誘いや助成金の払い過ぎが、大学生にとっては、ボランティア活動をしなければいけないという義務感を生みだし、かえって自発性をうちけしてしまうことも危惧しなければならない」と述べている。現在、実際に助成金をもらって活動することや、大学教員や市職

員、地域の大人からの話を受けて活動することが増え、この問題に直面している。

例えば「かまどベンチ」や「あすともカフェ」といった助成金事業について、個人や DoNabenet in あいちに生じるメリットやデメリットを考慮した上で取り組むと決め、進めている。しかし、大学教員と学生という関係性を考慮して断ることができなかったという声があったことは看過できない。また、「大学生だけでやる事業ではなく、市の事業なので、失敗や中止、大幅な変更ができない。」「大人からの期待や提案を踏まえて決まっている。」という声があったことからも、普段の学生だけの活動と比べて、責任や不安を強く感じている人がいることが分かった。

さらに、「食事会の場合は、ある程度活動に対して想いの共有がされており、レールがある。しかし、市職員や他大学の学生と一緒に活動するときには、漠然とした不安のようなものを常に抱えている状態だった。」という声があった。これは、大学生の社会貢献活動に対してだけ言えることではないとは思われるが、新しいことに取り組む大学生は、不安を抱えているということを意識し、精神面のサポートもあると、より意欲的に活動に取り組むことができるのではないかと考えられる。

大学生が活動することの強みとして、自由であり、大学生は 4 年間で入れ替わるため代ごとに新しい風が吹き、融通が利く点が挙げられた。市職員や周りの大人は、これらの点を存分に活かせるようなサポートや環境作りをすることで、学生の力をさらに引き出せるのではないかと考えられる。

様々な活動をしている DoNabenet in あいちだが、今後の活動についてメンバーはどのように考えているのか。インタビューを行った際、最後に、「大学生として、もしくは、DoNabenet in あいちのメンバーとして、これからやっていきたいと考えていること。また、それはどのような環境が整っていたら実現できると考えるか。」という質問をした。この質問に対する回答については、表 10 を見てほしい。

表 10：これからやっていきたいと考えていること

O さん ・大学生は流行に敏感で、自由であるため、新しいものを活動に取り入れやすい。 ・大学生は垣根が低い。地域の人にとって大学生は、知識が豊富で堅そうな NPO 団体などと比べて、年下であり、素人感があると思う。そのため、大学生が企画運営する会には参加しやすいと思ってもらえるのではないか。 ・大学生は 4 年間で入れ替わるのはさみしいし、いかに新規メンバーを獲得し、継続していくか、と考えなければならないところなど、悪いところもあるが、新しい風が吹き、代ごとに色が出る。団体を新しく変えていくことができる点が、大学生のいい点であると思う。 ・食事会などの、DoNabenet in あいちオリジナルの活動はメインとして変えずに、今後も活動していきたい。
P さん ・食事会の参加者が固定化している、また、普段からも地域活動に参加している人が集まる傾向がある。そのため、地域活動にあまり参加していない人にも食事会に来てもらいたい。 ・参加者から「幼稚園や小学校とかで食事会のチラシを配るのはどうか。」という意見を受けた。広報活動のサポートがあればいいなと思う。
Q さん ・地域の方（例えば高齢者の方、外国人の方）とお互いの文化について教え合う活動をする。 例えば、高齢者→自分たちの昔の遊びや生活の知恵など。学生→ SNS の使い方やスマホの使い方など。
R さん ・現段階の活動では、自分からつながろうとしない人など、本当につながりたい人とつながることができていない。行政や、社会福祉協議会の人がアウトリーチをしても、なかなか関係性をつくることが難しい人がいる。私たち大学生は、行政でも、地域の人でもない立場であり、様々な地域からきているからこその意見を述べたり、時間があったり、自由に動くことができる。だからこそ、できることがあるはずだと考えている。一方で、働いている人や、公務員は、活動に縛りがあるのではないかと思う。 そこで、市職員が活動するうえで困っていること、市が抱えている課題について、総合計画などの堅い文書だけでなく、市職員から直接、生の声を聞かせてほしい。市職員と大学生の交流の場があれば、大学生の視点や活動できることを提示できると考える。
S さん ・大学生の本業は学業であるため、学業で忙しい大学生が、書類作成や報告会の準備などを行うことは難しいというような大学生の気持ちを理解してほしい、とは思うが、大人や市職員も仕事で大学生と連携しているのであり、大人にとっても、学生と日程調整をしたりすることは大変であると思うので、そこを改善してほしい、と主張するのは違う、と考える。

・大学生は、メンバーの増減があったり、卒業したり、参加の頻度に違いがあったり、それぞればらばらな状況にいる。例えば、市民アクションのチームで、団体申請をするために名簿を作成し、役職をつける、という話があった。学生に役職をつけるということは信用されている、ということなので嬉しいことであり、人員確保は必要だし、重要なことであるとは思うが、名簿に載せてもらうことで、拘束される、と感じてしまう。このように、名簿を作成するなどして拘束されることに関して、ストレスを感じる。メンバーとなったことで、余計に、打ち合わせなどに行けない、役割を担えないとなると余計申し訳ないという気持ちが大きくなってしまい、相手がどうも思っていなかったとしても、こちらから溝を作ってしまう。学生に、どこまで求めているのか、教えてほしい。

では、DoNabenet in あいちの学生メンバーが、大学生という特徴や強みを生かし、主体的に活動していくために、どのような点を考慮すればよいのだろうか。

表 10 より、大学生がよりスムーズに社会貢献活動をしていくためには、相手が考える大学生に対するニーズを知り、より密な関係作りやコミュニケーションをとりたいという声が挙がった。インタビューより、メンバーは「どのタイミングで大人からのサポートを求めるのか、線引きが難しい」と感じていることがわかった。従って、大学生と大人が密な関係を作り、しっかりとコミュニケーションを取ることは、大学生が周りの大人と活動する上で抱える不安を取り除く要素の 1 つになり得るだろう。

そして現在、メンバー負担に感じていることについて、メインの活動である食事会と、新規事業のバランスが難しかったり、話し合う時間の確保が難しかったりするという点が挙げられた。初めから、まちづくりのイベントに参加したり、新規事業として挙げたような活動をすることを目的に活動している団体であればこのような問題は挙げられないと考えられるが、DoNabenet in あいちは、既に自分たちの活動である食事会がある。あまり新規事業ばかりに時間を割きすぎてしまうと、メインの活動が疎かになってしまう。余裕がなくなってしまうと、大学生だからこそ出せるゆるい雰囲気や余裕が感じられなくなってしまう恐れがある。

しかし、表 10 からも明らかなように、メインの活動である「食事会」は継続しつつ、新規事業にも取り組みたいという声が多く挙がった。インタビュー結果より、新規事業を行うことや、コラボをすることによって、DoNabenet in あいちの団体に対してや、学生個人に対しても負担やデメリットが生じるという意見が挙がったが、それ以上のメリットがあると学生は認識しているため、このような声が挙がったと考えられる。

限られた時間の中で、食事会や今後の活動についての想いの共有をしていかなければならない。そして、大学生が主体的に活動できるような環境でないと、余計負担に感じたり、活動に対して受動的になったりしてしまい、スキルの向上など、本来得られるべきはずのメリットを得られなくなってしまう危険性がある。そして、本来自分たちがやりたいことは何かという方向性を見失ってしまう。永井ら（2019）にも指摘があった通り、大人や周りからの過度なサポートや期待は大学生の活動に悪影響を及ぼす場合もあることが考慮されるべきと言える。こうした点を踏まえたうえで、今後の活動につなげていきたい。

付記　本稿は、JSPS 科研 16K04084（研究代表：松宮朝）による研究成果の一部である。

文献

小島祥美・石井晴雄・川原千香子・笹山実希・松宮朝，2018,「地域社会への貢献をめざした大学間連携の実践」『愛知淑徳大学アクティブラーニング』11:33-46.

小島祥美・石井晴雄・川原千香子・笹山実希・松宮朝，2019,「市民活動報告　地域社会への貢献をめざした大学間連携の実践」『東海社会学会年報』11:106-113.

永井杏・江口愛可吏・横井里帆・大崎あゆみ・松宮朝，2019,「大学生主体の地域活動の展開（上）」『共生の文化研究』13:48-59.

松宮朝，2011,「大学における地域連携・地域貢献と社会調査をめぐるノート」『人間発達学研究』2:43-50.

松宮朝・石井晴雄・川原千香子・小島祥美・中根多恵・笹山実希，2018,「大学連携におけるボランティア活動推進をめぐる課題」『共生の文化研究』12:26-47.

謝辞　活動でお世話になりましたすべてのみなさま、また、調査で貴重なお話をうかがわせていただいたみなさまに、深く感謝申し上げます。